

令和2年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業



令和2年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業(主催=日本武道館、全日本空手道連盟、日本武道協議会、後援=スポーツ庁)が令和3年3月13日~14日の2日間、日本武道館大会議室にて、研究者5名、研究協力者3名、連盟事務局2名の参加を以て実施された。

同事業は平成24年度から完全実施された中学校保健体育科における武道授業の充実へ向け、新学習指導要領に準拠し、年間8~10時間の授業時間想定で、各武道種目の特性を踏まえた、教育効果の上がる指導計画、指導内容、指導法、評価等について研究討議するものである。今回は、特別支援学校における空手道授業の推進が主要なテーマとなった。

■ 1日目(3月13日)

◇開講式

はじめに、主催者として日下修次公益財団法人全日本空手道連盟理事・事務局長が、「緊急事態宣言下にもかかわらず、ご参集いただきありがとうございます。コロナ禍においても、子どもたちの学びの場を確保し、指導にあたっている教育現場の方々に、全日本空手道連盟として、敬意と感謝を申し上げます。この指導法研究事業を、実りあるものにしましょう」と挨拶した。

続いて、吉川英夫公益財団法人日本武道館理事・事務局長が挨拶に立ち、「中学校における武道授業の実施は令和3年度で10年目を迎えます。全ての子どもが武道を学んで成人する時代の到来を楽しみにしております。空手道の特性を活かした、有意義な指導法研究事業になれば幸いです」と述べた。

研究者を代表して、小山正辰^{こやままさし}研究者が、「空手道は、『格技』から『武道』への名称変更を機に、遂には五輪種目に入るほどの知名度を得るまでになりました。特別支援学校の武道の授業においても、空手道は十分実施できると思います。ぜひ先生方の経験を全国の教員に伝えられるようにしていきたいと考えています」と挨拶した。

◇研究発表・事例発表

研究協議に先立ち、新学習指導要領改訂に合わせ、特別支援学校における空手道の授業実施校を増やすとの目標について、全日本空手道連盟事務局から説明があった。

研究発表では、佐藤賢一研究協力者が、特別支援学校における空手道の授業について、資料と映像を交えて発表し、「生徒の自己評価や担当教員への聞き取りから、生徒自身が社会性の高まりを実感し、相手を意識することや自分の意思

を伝えることの大切さを理解するようになったことが分かった。空手道における形と礼法に着目した学習は、社会性の育成に有効だ」と述べた。

続いて太田熊野^{ゆうや}研究協力者による事例発表があり、「中学生は、高校生と合同で授業を行い、動きを教えあうなど自主性をもたせた授業を行っている。小学校では、バランス感覚を失いやすいという聴覚障害特有の課題の克服を目指し、空手道の授業を取り入れ、体の正中線を重点的に意識させて生徒を指導している」と語った。

◇グループディスカッション

グループディスカッションは、研究者・研究協力者を2つのグループに分けて議論した後、それぞれ意見を述べる形がとられた。

○野中央子研究者

空手道の教育的価値をアピールし、全国空手道指導者研修会への参加を呼びかけることが大切だ。指導案から評価、指導資料まで一体となった授業モデルも必要だろう。

○井下佳織研究者

現場の先生こそ様々なノウハウをもっている。全空連がそれを吸い上げ、大枠となるテキストを作る必要がある。

○豊嶋建広研究者

そもそも、特別支援学校以外の学校で空手道の教育的効果が正しく認識されていない。まずは、実施しやすいという理由で空手道が授業科目として選択されている現状を改善すべきだ。

空手道の授業では、形の前提となる基本動作の時点で、生徒が協力しあい社会性を養う練習

ができる。その教育的効果が周知されれば、特別支援学校でも受けいれられるのではないかと。

■ 2日目 (3月14日)

◇全体協議

午前中は「創作組手の指導法について」の協議が行われた。その中で、野中研究者と水村春輝研究協力者が、試みに初歩的な技術のみを使った組手を創作し、実演した。野中研究者は、創作が苦手な生徒への救済措置として、「技のイラストを描いたプレートを用意し、『この技の次の動作はこの中から選ばせる』という形にすれば良いと思う」と提案した。

午後には、来年度の指導法研究事業で取り上げるべき議題について話し合われた。日下理事・事務局長は「我々は空手道のことは分かっても、特別支援学校での指導については素人である。現場に行って、指導者の声を聴き、障害のある子どもに対して全日本空手道連盟として何が発信できるのか考える必要がある。来年度は、できれば特別支援学校の視察をしたいと思う」と発言した。

◇閉講式

各研究者が2日間の研究事業を講評した。小山研究者は、「この一年は、新型コロナウイルスの影響でリモート会議ばかりだった。実際に相手と会ってコミュニケーションをとることの大切さを実感した研究事業となった」と述べた。最後に、日下理事・事務局長が「学校現場の変化に沿って、我々も進歩していかなければならない」と総括し、全日程を終了した。

